

中国における女子大学研究の動向と課題

比較教育社会学コース 加藤 靖子

A Review of Research on Women's Colleges in China

Yasuko KATO

This paper describes the recent trend of women's colleges in China and reviews literatures on them. Studies are classified according to the type of topic. At conclusion of this review, suggested topics for future research are discussed.

目次

1. はじめに
2. 中国の女子大学の動向
3. 中国における女子大学に関する研究動向
 - A. 外国の女子大学に関する研究
 - B. 中華人民共和国成立以前の女子大学に関する研究
 - C. 改革開放政策開始後の女子大学に関する研究
4. おわりに

1. はじめに

中国において女子高等教育機関が設立されるのは19世紀末からであり、杜（2011）によれば1891年にアメリカの長老派教会が設立した蘇州女子医学院が最初だといふ¹⁾。これ以降、専科學校なども含め様々な女子高等教育機関が設立された。しかしながら、中国では1920年頃から女性に対する大学の門戸開放が行なわれはじめ、1922年時点で国立11校、省立4校、私立16校が共学化²⁾していた上に社会情勢が不安定だったこともあってか、長期間存続した女子高等教育機関は多くない。中華人民共和国成立後の1952年に院系調整と呼ばれる大規模な大学再編成が行なわれたが、その頃まで残っていたことが確認できるのは、ミッション系の華南女子文理学院（1908年設立）、金陵女子大学（1915年設立）、震旦女子文理学院（1937年設立）と公立の国立女子師範学院³⁾、河北省立女子師範学院（1929年設立）、私立の両江女子体育（師範）専科學校（1922年設立）ぐらいである。また、これらの教育機関の他に、ごく短い期間ではあるが中国共産党が設立した女子だけの幹部養成機関⁴⁾が存在した。

院系調整後、中国から全ての女子高等教育機関が一

旦姿を消すが⁵⁾、改革開放政策開始後の1980年代半ばから再び設立されるようになる。それらの機関は中国の全体的な高等教育機関数から言えば非常に少数であるが、一度消滅した別学高等教育機関が計画経済から市場経済に移行した中国で再び設立されたことを考えると、非常に興味深い存在である。また、このような歴史的経緯を持つ中国の女子高等教育機関が有する課題等を理解することは、同じように女子高等教育機関を有する我が国にとっても有益であると考えられる。

そこで、本稿では、中国の女子大学の近年の動向を概観した上で、女子大学に関する研究を整理し、今後の課題について検討したい。

2. 中国の女子大学の動向

改革開放政策開始後の1982年に憲法が改正され、中国で再び民営（中国語で「民弁」）の教育機関を設立することが可能になった。中国の高等教育⁶⁾は、教育を修了するとその学歴を国家が認定する「学歴教育」と学歴として認定されない「非学歴教育」に大別され、「学歴教育」を行なう教育機関（学歴認定校）には、本科（日本の四年制大学に相当）レベルの大学・学院、及び専科（日本の短期大学に相当）レベルの職業（技術）学院、高等専科學校の2種類があり、「非学歴教育」を行なう教育機関には「専修学院（専科レベル）」と「独学・成人教育補習校とその他の各種学校」の2種類がある（夏芸 2009）。

2015年現在、管見の限り本科レベルとしては学院3校、二級学院⁷⁾1校、三級学院1校、専科レベルとしては3校存在する。その他、女子学院と称する機関はいくつかあるが、ほとんどが「虚体実弁」すなわち独自の専攻を持たず、独自に募集した学生を持たない

大学内の特別プログラムのようなものである。たとえば同済大学女子学院では、学内で選抜された女子学生向けに「女性文学研究」や「女性の権利と保護」、「生け花」などの教養コースを提供している⁸⁾。

これらの女子高等教育機関の全体的な概要については大濱(2014)に詳しいので省くが、高等教育機関として安定しているものは一部で、全体的にはあまり発展していないように見える。中華全国婦女聯合会下属の省婦女聯合会は公立大学などと共同でこれまで様々な機関を設立してきたが、近年は学歴教育を行なう機関を設立していない⁹⁾。上海工程技術大学女工學院(2005年)や浙江伝媒学院女子学院(2011年)のように報道はされたものの、大学のウェブサイト上で確認できない、もしくは近年情報が更新されていない機関もある。

既存の女子大学も苦戦が伝えられている。天津師範大学国際女子学院(1993年設立)は2007年に同大の他学院と統合され、西安培華女子大学は本科昇格時に共学化した。その際女子学院を設置したが、これは同済大学同様のプログラムである¹⁰⁾。さらに、2012年時点では、全学生の10%程度ではあるが大学・専科レベルの女子大学全てで男子を受け入れている。そのため、現在では女子だけという意味での女子高等教育機関は中国では失われている。共学化に関する研究はまだ現れていないようであるからその詳細については不明である。とはいえ、報道等によると、華南女子職業学院の場合、省内の受験者数の減少が男子受け入れを決めた直接的な要因であるといい¹¹⁾、おそらく他の女子大学の共学化も同様の事情によるものと思われる。従って、中国の女子大学は、復活からわずか30年で日本やアメリカの女子大学と同様の問題に直面したと言える。

3. 中国における女子大学に関する研究動向

上述の通り、中国において女子高等教育機関が復活したのは改革開放政策が開始された1980年代半ばである。従って、研究対象としても比較的新しく、女子大学に関する本格的な調査・研究としては中国の中・長期プロジェクトである「全国教育科学『九五』規画(1997-2000年)」(全国教育科学「九五」計画)教育部重点課題の一つである「面向21世紀的中国女性高等教育研究」が嚆矢と言える。このプロジェクトの研究成果は安主編(2002)にまとめられているが、それ以降も女子大学に関する研究が発表され続けている。文

献レビューについては管見の限り、欧陽(2011)、段ほか(2013)がある。しかしながら、前者は書籍が多く学術誌掲載の論文はあまり取り上げておらず、後者が対象とするのは特色研究のみであり、これら二つのレビューのみでは女子大学に関する研究の全体的な傾向は見えにくい。

そこで、本稿では、中国学術文献オンラインサービス(China National Knowledge Infrastructure, 以下CNKI)で、「女子院校」「女子大学」「女子高校¹²⁾」「女校」の他、「北京女子師範」「女子文理」といういずれも女子大学に関連するキーワードでタイトル検索して得られた文献を対象にレビューを行なう。CNKIでは現在1994年以降の文献が利用可能で、タイトルの他、キーワードやテーマでの検索も可能である。しかし、データベースを「SCI来源期刊」「核心期刊」「CSSCI¹³⁾」に限っても、キーワードやテーマでの検索だと数百もの論文がヒットしてしまうため¹⁴⁾、タイトルに絞って検索を行なった。その結果得られた文献105本のうち、回想録や紹介記事、個人に焦点をあてたもの、短大レベルの職業技術学院や中等教育機関、女子校全般を対象としたものを除く、入手可能な文献を中心にレビューを行なう。また、核心期刊掲載の論文ではないが重要だと思われるものについても適宜取り上げる。

女子大学に関する研究は、大まかに三つの系統に分けられる。すなわち、外国の女子大学を対象としたもの、共産党設立の幹部養成機関を含む清末・民国期の女子高等教育機関を対象としたもの、および改革開放政策開始後に設立された女子高等教育機関を対象としているものである。以下では、この系統に沿って研究の概要と知見を整理する。

A. 外国の女子大学に関する研究

対象とした研究のうち該当するのは3本で、対象国はアメリカが2本、日本が1本である。これらの研究は、対象国の女子大学の歴史を概観し、その存在意義や特徴について考察するという点が共通している。

まず、アメリカを対象とするのは張(2004a)と張(2004b)であるが、内容はかなりの部分が共通している。歴史を発展期、挑戦期、再興期に分けて概観し、アメリカの女子大学の特色として ①共学では提供不可能な女性のための成長的な空間を提供している、②ジェンダー社会化の重要な場所である、③女性のために真の「学生本位の」(中国語では「以生為本」)教育環境を提供している、④柔軟な管理モデルが女性にとってより広範な成長機会を提供している、の4点を

挙げ、女子大学は多様な高等教育の一つとして積極的な作用を及ぼしているとのべている。

次に、日本を対象とした何ほか（2014）では、5つの女子大学を対象に設置学科、教育理念に関わる動き、改革やイノベーションを考察した。そして日本の女子大学は性別モデルを越えた学科の設置、女性の時代的な特質に合致したカリキュラムの充実、社会の需要に応える教育組織の調整・再構築といった一連の改革によって、女子高等教育を新たな段階に進めたが、同時に自らの改革は方向を見失った苦境に陥っていると指摘している。

B. 中華人民共和国成立以前の女子大学に関する研究

この系統に該当するのは20本で、全て特定の大学、すなわち金陵女子大学、北京女子高等師範学校（以下、女高師）、華南女子文理学院、上海震旦大学女子文理学院、延安中国女子大学、第二野戦軍女子大学を対象としたものである。これらの研究の目的としては、カリキュラムなど大学の実態、人材育成方法と歴史的な貢献、意義などを明らかにしようとするものが多い。

まず、実態を明らかにしようとしたものには、金陵女子大学の体育教育を対象とした金ほか（2015）、音楽教育を対象とした王（2015）、女高師（北京女子師範大学）の音楽科を対象とした祁（2009）、高（2014）とその学生たちを対象とした祁（2014）、日中戦争期の華南女子文理学院の教員と学生を対象とした黄（1995）、第二野戦軍女子大学の体育教育を対象とした李（1997）がある。

次に、歴史的な貢献やその意義に関するものについて述べる。まず、金陵女子大学の体育教育に焦点をあてた張ほか（2007）と劉ほか（2008）があり、どちらも体育科の教育理念として女性本位をあげており、その歴史的な貢献として前者は女権思想の構築、女性体育人材の養成、キャンパス文化の構築、社会と国家への奉仕を挙げ、後者は女性運動の発展推進、体育人材の養成を挙げた。さらに、能力や素質に応じて異なった教育を実施し、個性を育成しようとする金陵女子大学体育教育の理念は現代における体育カリキュラム改革の参考となるとのべている。

次に、任（2014）は、ミッション系女子大学の人材養成モデルの特徴を分析し、女性に的確に対応したそのカリキュラムは、女性の将来的な発展のための地固めとなったとし、王紅岩（2009）は金陵女子大学の校訓である「厚生（豊かな命）」（Abundant Life）をキーワードに人材育成モデルの分析を行ない、国家や

社会に役立つ人材の養成や女子高等教育事業の発展を促進したと評価している。歴史貢献や意義に関するものでは、これら以外にも延安中国女子大学を対象とした梁（1999）、方ほか（2008）及び鄭（2011）がある。三者とも中国女子大学が女性幹部育成に大きな役割を果たしたとする点は同じであるが、方ほか（2008）ではさらに中国女子大学と他大学との合併にも言及し、その理由について経済的と政治的の二つの要因によるものだとしている。

その他の研究としては、女高師と金陵女子大学を比較し、その異なる環境が社会活動や結婚等の学生のライフスタイル選択に影響を及ぼしたとする張（2010）、中国女子大学新聞系を「系科（学科）」だとしてきた従来の説に対し、新聞「系」は規模から言えばグループであり、当時の人々が単にそう呼んでいたに過ぎないと指摘した王延雄（2009）、金陵女子大学を事例に民国期のジェンダー問題を分析した金（2006）がある。朱（2011）は、金陵女子大学と華南女子大学における女性の内部争いや衝突を描くことによって「同質の女性グループ」というのは一種の想像であって融合と衝突の並存が近代中国キリスト教女性の現実であることを明らかにした。また、女高師に関する研究の現状を分析した姜ほか（2010）では、新中国成立後の「中性化」した研究への志向や史学の伝統的な理論などの影響で女性研究やジェンダー研究があまり盛んではないために、女子教育研究は学会の主流の関心分野になりにくいとのべた上で、女高師の学生個人の生活を考察することは、中国社会の初期近代性への転換を洞悉し、新たに読み解き振り返るための窓口となるとのべている。

以上のべてきたように、新中国成立前の時期の女子大学に関する研究は、カリキュラムなど大学自体の特徴に着目する研究がほとんどであるが、近年は大学を取り巻く環境を分析対象に加える研究も現れている。劉（2014）は、上海震旦女子文理学院の歴史を三段階に分けて考察し、当該大学が戦争中の不安定な社会の中、経営を続けることができたのは上海の独特な政治・社会環境と女大自身の採った生き残り政策によるものであることを明らかにしている。

C. 改革開放政策開始後の女子大学に関する研究

1. 「特長」研究

改革開放政策開始後の女子大学に関する研究では「弁学特色¹⁵⁾（教育の特長）」をテーマとしたものが非常に多い。「教育の特長」とは、羅ほか（2007）によ

ると「実質的には大学の個性であり、理論上ではどの大学も皆特長を出ることができるが、実践において大学の全てのものが特長となるわけではない」といい、①独自性、②優良性、③安定性、④発展性、⑤体系性を備えていなければならないという。

この系統の研究には、杜（2005）、杜（2006）、羅ほか（2007）、易（2007）、羅ほか（2008）、杜（2009）、羅ほか（2010）、欧陽（2012）、羅ほか（2013）などがある。段（2013）は、特長に関する研究を教育目標や理念、教育主体（学生・教員）、人材育成、学科・専門課程、カリキュラム構築、管理、キャンパス文化の7つの対象にわけて整理しているが、本稿で取り上げる研究について言えば、対象が異なっても内容的には重なる部分も多いため同じ特長研究として扱う。

まず、杜（2005）では、女性の特長を際立たせることは女子大学が発展するための必然的な選択であるとのべて、女子大学では学科の設置には女性の生理的・心理的特徴を考慮することや基礎知識、専門知識、職業的なスキル、女性としての資質、生活スキルを身につけるような育成モデルを採用することなどを提言している。また、杜（2006）では女子大学の教育特長を際立たせるためには5つの教育改革方法があるとのべているが、なかでも女子大学の教育上の位置が（教育改革の）前提条件になるとして、地域型の応用的で実践的な教育のタイプを基本路線とすることなどを挙げている。杜（2009）は、中国の歴史を清末から現代まで6つの時期に分けてそれぞれの女子教育機関の教育特長について描き出している。羅ほか（2010）では、①特長ある学校経営を指針とすること、②就職志向であること、③教育と科学研究を共に重んじること、④キャンパス文化をつくることに力を入れること、⑤国際的な視野を開拓し広げること、の5つが一体となったモデルを造り実行することによって女子大学の発展を促すことを提言している。そして、羅ほか（2013）では大学の文化に焦点をあて、女子大学の特長的な文化の特性は、女性文化を特長とすること、文化伝承性、文化熏陶性、文化の担い手の多元性という4つの側面に現れているとし、女子大学の文化構築は教育の特長と競争力の中核を具現化したものであるから、それらによって女子大学の内涵（内包）の発展を促すことを提言している。

これら大学教育全体を対象とした研究以外に、カリキュラムに焦点をあてた研究もある。羅ほか（2008）では、西洋女性主義理論や女性学概論、マルクス主義

女性観というように、科目に女性要素を組み込んだ中核・基礎・周辺の三層から構成されるカリキュラムを構築することを主張している。

以上のように、特長をテーマとする研究は、ほとんどが政策提言を伴っているため、必然的に女子大学としてのあり方や共学大学に対する差違化を検討することになる。このような必然性という視点から女子大学の特長を考察しているのが易（2007）である。易は、女子大学は「因性施教（特性教育）」を教育の基本方針としており、特長は「教育対象が全て女性だという特殊な事情から出た理性的な選択」で、「特性教育の実践過程の中で形成されるもの」だとのべている。実際に、欧陽（2012）によると、女子大学では学科設置やカリキュラム構築において女性の特徴に合っているかどうかが考慮され、女性学などを開設してジェンダー平等を推進しているという。とはいえ、こうした努力は学生の大学に対する評価には繋がっていないようである。次回も女子大学を選ぶか、友人に女子大学を薦めるかという学生アンケートの質問に対し、結果は「はい」20.8%、「いいえ」26.5%、「状況による」52.7%であったという。欧陽（2012）はこの結果を受けて、別学やその効果に対する学生の評価は明らかに分かれているし、大学の継続可能性から考えると学生の進学希望不足は女子大学の課題であるとのべている。

2. その他の研究

その他の研究としては、女子大学の発展や現状分析をテーマとしたものや女子大学の学生に焦点をあてたものなどがある。

まず、張（1997）は中国の女子大学の歴史を概観し、1980年代の女子大学設立の背景に言及している。張（前掲書）によると、中国に女子大学が再度出現したのは様々な要素によるもので、具体的には①新中国成立前に存在した女子大学の影響、②国外の女子大学の影響、③女子高等教育の需要の拡大、④国外の女子大学と関連する研究成果の影響であるという。女子大学と関連する研究の影響というのは、おそらくアメリカの研究であろうが、研究の全体的な傾向として女子大学は女子学生の成長に有利であるという知見が示されたことを指していると思われる。一方、楊（2002）は、経済体制の多元化による高等教育の多元化と女性運動の高まりという二つの要因を挙げている。楊（前掲書）は女性運動の背景として、効率性や競争を求める市場原則と男女平等原則が衝突するようになったことがジェ

ンダー問題に対する社会意識を刺激し、それにより社会活動家や女性運動組織が多くの取り組みを行なった結果、女性問題に対する社会の意識が高まったことや、女性関連政策の制定と実施が政府のアジェンダに入ったことなどを指摘している。

女子大学の現状を外側から把握しようとしたこれらの研究に対し、劉（2002）は質的方法を用いて女子大学の現状を内側から把握しようと試みている。劉（前掲書）は5校の女子大学の教育担当の校長、教務処長、女性学コースの教員にインタビュー調査を行ない、女子大学が経営費用や社会的承認という問題に直面していることを明らかにした。特に、後者については、女子大学の意義、存在意義の有無、ジェンダー意識を備えた女子大学の必要性についてさらに短い検討を行い、女子大学の使命として①女性が積極的に男女平等運動に参加する土台となる、②ジェンダー意識を備えた女性の教育を主流教育に普及させていく中で、主流教育に存在する女性の需要軽視という状況を変え、全ての女性が教育の受益者となるよう努力する、という二つを挙げている。

これら女子大学自体を対象とした研究以外に、女子大学の学生を対象とした研究もある。まず、石（2002）ではジェンダー意識についてアンケート調査を行ない、共学大学の男女学生と女子大学の学生とを比較した。その結果、女子学生（共学大学も含む）は、男子学生に比べ、伝統的なジェンダー観、家庭における性別役割平等観、ジェンダー役割平等観が強いことが明らかにされると共に、共学大学の女子学生は女子大学の学生に比べ伝統的なジェンダー観を持っていることが明らかにされた。また、陳（2008）は女子大学の1年生を対象に、社会的支援（social support）及び自信について3年間のコホート調査を行なった。その結果、女子大学の学生は全国10都市の大学生にくらべ社会的支援レベルが明らかに高いことや、自信は専攻や学年によって異なること、自信と社会的支援との関係も専攻や学年によって異なることを明らかにしている。陳ほか（2009）では、女子大学の学生の人格特性、対処方法、精神衛生について分析している。その結果、女子大学の学生は他の研究における女性被験者達よりも神経質であり、外向性、寛容性、同調性、誠実度の次元（dimension）で得点が明らかに低いことや、共学の学生と比べると、対処方法では双方に違いはないが、人格特性や精神衛生状況は女子大学の学生の方がよいことなどが示された。さらに向（2011）では女子大学学生の自尊心保護戦略の特徴について分析し、女子大

学の学生は防衛的悲観（defensive pessimism）¹⁶⁾のスコアがセルフ・ハンディキャッピングよりも高い、つまり共学大学の学生に比べ自らの自尊心を守るための戦略として防衛的悲観戦略を採る傾向があることなどを明らかにしている。

これらは女子大学の学生の精神面に焦点をあてた研究であるが、女子大学の近年の状況を反映して女子大学の男子学生を対象とした研究も現れつつある。賈（2012）では、学生指導員¹⁷⁾として男子学生1名に接した事例から、学生の適応能力の育成を重視すること、女子大学であっても男子学生のジェンダー意識を強化する必要があることなどを指摘している。後者は具体的には女子教育を展開すると同時に、男子学生をも一つの集団として、男女が共同参加するのにふさわしく、継続可能で広く影響のある「第二課堂」（サークル活動）を入念に計画し、ジェンダーアイデンティティを踏まえた集団帰属感を彼らが持てるようにすることだという。また、男女を区別した試験と評価を有機的に結びつけた審査メカニズムの構築を検討する必要があると指摘している¹⁸⁾。

最後に女子大学の学生の就職状況について分析した黄（2008）は、女子大学はポーターの「5つの力」（①供給企業の交渉力、②買い手の交渉力、③競争企業間の敵対関係、④新規参入業者の脅威、⑤代替品の脅威）から来る競争に晒されており、様々な機関の卒業生が女子大学卒業生のライバルである上に、女子大学卒業生は様々な理由により労働市場で特色や影響を形勢できずにいるとのべている。その様々な理由とは、①設立から時間が経っていないこと、②女子校の教育の性格や特徴に対して検討が不十分、③卒業生は伝統的な文系専攻に集中しており、市場で非常に不足している専攻が少ない、④卒業生が労働市場で社会的な影響力を形成していない、ことであるという。こうした状況に対し、黄は伝統校には少ない第三次産業に関連する専攻など市場の需要に合わせた学科の設置を行なうことなどを提言している。

中国においては、女子大学を対象とした研究の多くは「新興」の女子大学を取り巻く厳しい状況を反映して、既存の高等教育機関との差異化を模索するものである。従って、このタイプの研究は今後も蓄積されていくであろうが、一方で男子学生受け入れなど近年の変化から生じる新たな状況に関心を持つ研究も増えていくと思われる。

4. おわりに

以上のように中国の女子大学研究の動向を追ってきたが、最後にこれら先行研究を踏まえて、研究上の課題について思うところをのべておきたい。

中国高等教育は、進学率¹⁹⁾が2002年に15%²⁰⁾、2014年時点では37.5%²¹⁾に達し、全体的には大衆化段階、北京市など一部の大都市ではユニバーサル段階(2010年で59%²²⁾)にある。このような環境を反映して、改革開放後の女子大学に関する研究は、他の大学との差異化を目指して特長を模索するものが非常に多い。ただ、こうした研究は、同時に女子大学の存在意義証明をも目的としているため、「女子」大学であることを意識しすぎて却って身動きがとれなくなっているように見える。女子大学としての差異化という点では、むしろ劉(2002)が指摘したように、女子大学がかつて直面していた社会的承認という側面からの研究や、女性のエンパワーメントという大学の機能的側面からの研究が必要であると思われる。ただし、段(2013)も指摘しているように、現代の女子大学を対象とした研究は実証を伴わない理論的な概説が多いので、今後は実証的に明らかにされる必要がある。

その点を踏まえると以下のような研究が考えられる。すなわち、社会的承認という側面では、たとえば質問紙調査を行なった欧陽(2012)によると、女子大学の学生の進学選択理由のうち「保護者の意見に従った」27.2%と「他大学が不合格であった」18.1%を合わせて非自主的選択が半数近くを占めるということから、高校生や保護者などに対するさらに詳細な意識調査が考えられる。また、大学の機能的側面については、アメリカで広く行なわれているカレッジ・インパクト研究を行い、女子大学のカリキュラムのみならず女子学生のみを対象にした共学大学の特別プログラムなどの教育効果を明らかにすることで、差異化の方向性が見えてくると思われる。

さらに、上述の通り2012年時点で全ての女子大学が男子を一部受け入れていることから、受け入れ決定までの政策過程を考察することで、女子大学存立にかかわる人々の認識を明らかにすることができる。とはいえ、中国では外国の組織や個人が社会調査を行なうことは法律で禁止されているため²³⁾、社会調査が必要な研究については中国国内での進展に期待したい。

最後に、今後の女子大学の方向性に関する課題について述べる。「特長」に関心をもつ研究によって明らかにされているように、中国の女子大学に設置されて

いる学科は観光管理や語学、幼児教育、会計学など女性が就業しやすいと考えられている文系分野が中心である。これは、中国の女子大学が女子学生を集めやすい学科構成にしていることによるもので、中国の場合も日本ほどではないが性別によって選好学科に偏りがみられる。2013年の調査²⁴⁾によると、看護学、財政学、外国語、旅行管理などで女性の割合が多くなっているのに対し、物理学、機械、地質など理工学系では女性の割合は2割程度と少ない。こうした理系分野での女性の少なさに対し、アメリカの大学はもとより、日本の女子大学でも理系など伝統的に女性が少ない分野での人材育成を目指そうという動きが近年現れている²⁵⁾。しかし、中国では上海工程技術大学女工師学院のケースなど女性が少ない分野での人材育成促進を試みる動きはあったようであるが、その後の展開や効果の検証については行なわれていないようである。そこで、このような試みに対する検証を行なうと共に、伝統的に女性が少ない分野での人材育成に女子大学がどのような役割を果たしうるかという点について検討することも重要になってくるであろう。

注

- 1) 杜祥培 2001.『中国女子大学弁学思想与实践演化研究』中央民族大学出版社, p.45
- 2) 程謫凡 1936.『中国現代女子教育史』中華書局有限公司 pp.173-4より計算。
- 3) 1940年に国民党によって四川省に設立された機関で、1919年に昇格した北京女子高等師範学校とは異なる。
- 4) 中国女子大学(1939~41年), 第二野戦軍女子大学(1948~49年)など。
- 5) ただし、中等教育では1968年頃まで女子だけの教育機関が存在した。
- 6) 高等学校が更に普通高等学校と成人向けに継続教育を行なう成人高等学校に分かれる。
- 7) 二級学院は公立高等教育機関の系列校の形式を取る民営高等教育機関(鮑 2005)であったが、2008年に「独立学院設置与管理弁法」の公布により整理された(詳細については(楊 2011)。現在「二級学院」という場合は、大学下屬の組織(日本の学部に相当)を指すようである。また、上海師範大学女子文化学院は人文与伝播学院(二級学院)の下屬であるので三級学院と呼ぶ。
- 8) 「同濟女子学院女性特色班簡介」<http://www.tongji.edu.cn/~nzxy/index0.htm> 2015年9月5日取得。
- 9) 瀋陽師範大学女子学院(2008年設立)は「短期訓練を主とし、積極的に學歷教育を發展させ、多層で多様な教育訓練システムを構築するよう努力する」(<http://www.sydxnzxy.com/CollegeIntroduction.aspx> 2015年9月6日取得。)としているが、学生募集を見るかぎり學歷教育は行なっていないようである。
- 10) 西安培華学院女子学院「教学特色」<http://www.peihua.cn/template/>

- yuanxi/nzxyx/View.aspx?id=609&&class_id=3 2015年9月6日取得。
- 11) 「百年女校華南女院今年首次招男生」東南快報 2012年6月7日 <http://news.163.com/12/0607/11/83D2SFJ70001124J.html> 2015年9月6日取得。
 - 12) 中国語の「高校」は高等院校・高等学校の略で高等教育機関（普通高等学校と成人高等学校）を指す。
 - 13) SCI (Science Citation Index) はトムソン・ロイター社のデータベース。CSSCI (中文社会科学引文索引) は南京大学のデータベース、「核心期刊」は北京大学の『中文核心期刊要目総覧』であるが、いずれも引用分析や専門家による審査を経て選定され（中文核心期刊要目総覧は4年に1度見直し）、収録されている雑誌は学術性が高く、権威があるとされている。
 - 14) 中国では一つのテーマに対し多くの研究が存在し相互に内容が似ていることがある。中国は大学の数が多く研究者の数も多いので、そのような状況が生じてしまうのかもしれない。しかしながら、類似の研究が蓄積される最大の原因は、分野にもよるのかもしれないが、おそらく多くの論文で先行研究の検討が行われていないことによるものだろう。
 - 15) 弁学は本来「学校運営」の意味であるが、「弁学特色」「弁学理念」のような使われ方をした場合、日本語では「教育」が訳語として妥当であると思われたので教育の特長とした。
 - 16) 小島 (2011) によると、Norem (2001) は、「悲観主義者の中に失敗や最悪の状況を想像し、起こり得る可能性をすべて熟考することによって将来の出来事に対する努力や準備が動機づけられる認知的方略を有する者がいることを示し、彼らの認知的方略を defensive pessimism (防衛的悲観、日本では防衛的悲観性と訳すことが多い) と表現している」という。
 - 17) 指導員 (中国語：輔導員) とは「高等教育機関教員陣の重要な構成部分であり、德育（政治思想・道徳品性に関する教育）活動に従事し、大学生の思想政治教育を発展させる主力であり、大学生を健やかに成長させる指導者で先導者である」と定義されている（『教育部關於加強高等学校輔導員、班主任隊伍建設的意見（教社政〔2005〕2号）』http://www.moe.edu.cn/publicfiles/business/htmlfiles/moe/moe_512/201006/88984.html 2015年9月6日取得。）
 - 18) 例として、体育科目中の健美操では女性はいよ成績を取りやすく、また女性学概論のような科目では女性の方が興味を持ちやすいことを挙げている。中国の女子大学が共学大学に対する差異化のため女性を強調したカリキュラムになっていることによるものと思われる。
 - 19) 中国の場合は、高等学校における在学中の学生総数と政府が定めた入学年齢人口（18～22歳）との比率（毛入学率）であり、日本の進学率とは異なる。
 - 20) 鳳凰網「教育部：2011年全国高等教育毛入学率達26.9%」（2012年8月31日）http://news.ifeng.com/mainland/detail_2012_08/31/17255914_0.shtml 2015年9月10日取得。
 - 21) 中国青年報「去年全国高等学校毛入学率達37.5%」（2015年7月31日）http://zqb.cyol.com/html/2015-07/31/nw.D110000zgqnb_20150731_2-05.htm 2015年9月25日取得。
 - 22) 北京考試報「北京高等教育毛入学率達59%」（2010年10月15日）<http://www.bjeca.cn/html/ksb/zhongyaoxinwen/2011/0309/33182.html> 2015年9月25日取得。
 - 23) 2004年10月施行の「涉外調査管理弁法」第9条では「外国の組織や個人は中国国内において直接市場調査や社会調査を行なうことは許されない」と定められており、社会調査を行なう場合、中国国内の涉外調査許可証を取得している機関などに委託するか共同で行なう必要がある。（中華人民共和國中央人民政府「中華人民共和國國家統計局令第7号」http://www.gov.cn/gongbao/content/2004/content_63040.htm 2015年9月25日取得）
 - 24) 哈爾濱工業大学商業智能實驗室「專業男女比例2013年中国高校各專業就業狀況調查報告 專業男女比例排行榜」http://bi.hit.edu.cn/sex_rank_list.html 2015年9月25日取得。
 - 25) たとえば、お茶の水女子大学と奈良女子大学は、理工系の女性リーダーを育成すべく共同で「理系女性教育開発共同機構」を2014年に設置した。<http://www.ocha.ac.jp/news/h261117.html> 2015年9月25日取得。

引用文献

- 安樹芬主編 2002.『中国女性高等教育研究』高等教育出版社
- 鮑威 2005.「第4章 民營高等教育と独立学院」黃福壽編『1990年代以降の中國高等教育的改革と課題』広島大学高等教育研究開発センター、pp.35-44
- 陳新業 2008.「女校大学生社会支持、自信特点追踪測評」『山東師範大學學報（人文社会科学版）』總第216期、pp.105-108
- 陳新業・姬彥紅・張建玲 2009.「女校大学生個性特性、應對方式与心理健康狀況的对比研究」『山東師範大學學報（人文社会科学版）』總第224期、pp.102-106
- 杜祥培 2005.「突出女性特色 建設精品女子大学」『中国高教研究』2005年第1期、pp.92-93
- 杜祥培 2006.「特色是女子大学的生命之源—論高等教育大衆化背景下的女子大学教学改革」『高教探索』2006年1期、pp.51-52
- 杜祥培 2009.「女子大学弁学特色的歷史性掃描」『現代大学教育』2009年第4期、pp.54-59
- 杜祥培 2011.『中国女子大学弁学思想与实践演化研究』中央民族大学出版社
- 段佳・杜学元 2013.「女子高校特色研究文献述評」『長治学院學報』第30卷第1期、pp.85-87
- 方紅姣・周錦濤 2008.「抗戰時期延安女性幹部的培養—以中国女子大学為例」『前沿』2008年第5期、pp.191-194
- 高陽 2014.「国立北京女子師範大学音楽系考」『内蒙古師範大學學報（教育科学版）』第27卷第9期、pp.31-33・49
- 何瑋・庄婷婷 2014.「日本女子高校教育機構の最新動態—基於五所女子高校微觀考察」『日本問題研究』第28卷（總第174期）、pp.50-56
- 黃海群 2008.「女子院校卒業生就業的形勢分析与对策建議」『中華女子學院學報』第20卷第3期、pp.38-42
- 黃新憲 1995.「抗戰時期的華南女子文理學院師生」『福建党史月刊』1995年10月、pp.20-22
- 賈萍萍・王愛新 2012.「女子院校中男生的培養与教育案例探析」『山東女子學院學報』總第103期、pp.81-83
- 姜麗靜・廖志強 2010.「辺縁處的別樣行走—關於“女高師”的研究現狀、研究地位及研究視角」『高教探索』2010年2期、pp.83-87
- 金慧俠・許家成 2015.「論金陵女子大学的体育教育」『蘭台世界』2015.7月上旬、pp.120-121

- 金一虹 2006. 「民国時期女子高等教育的性別議題－以金陵女子大学為個案」『婦女研究論叢』総第71期, pp.43-50
- 小島弥生 2011. 「防衛的悲観性と賞賛獲得欲求・拒否回避欲求の関連－2つの承認欲求がともに強い人の特徴について」『埼玉学園大学紀要 人間学部篇』11, pp.67-74
- 李征 1997. 「第二野戦軍女子大学体育教育面面観」『成都体育学院学报』第23卷第4期, pp.6-7・21
- 梁怡 1999. 「延安女子大学評介」『抗日戦争研究』1999年第2期, pp.91-104
- 劉夢 2002. 「女子大学併学模式分析－对我五所女子高等院校的定性研究」安樹芬主編『中国女性高等教育的歴史与現状研究』高等教育出版社
- 劉鵬・顧淵彦・楊聖涛 2008. 「民国時期金陵女子大学の体育專業教育」『体育学刊』第15卷第4期, pp.53-56
- 劉雪芹 2014. 「上海震旦女子文理学院簡論」『史林』総第149, pp.11-17
- 羅婷・胡芸華 2007. 「女子大学特色發展戰略的理論思考」『現代大学教育』2007年第2期, pp.101-105
- 羅婷・謝再蓮 2008. 「女子高校特色過程体系的研究与实践」『国家教育行政学院学报』2008年9号, pp.19-23・30
- 羅婷・吳永光 2010. 「女子高校特色併学模式的研究与探索」『中国高教研究』2010年第9期, pp.55-56
- 羅婷・宋興明 2013. 「女子大学特色文化的探討」『高校教育管理』第7卷第3期, pp.7-10
- Norem, J.K. 2001. "Defensive pessimism, optimism, and pessimism", Chang, Edward C. *Optimism and pessimism: implications for theory, research, and practice* American Psychological Association Press, pp.77-100
- 大濱慶子 2014. 「改革開放後の中国における女子大学再興の軌跡：高等教育の周縁から主流へ」『人間研究』50, pp.31-48
- 歐陽林舟 2011. 「女子院校研究文献綜述」『湖南師範大学教育科学学报』第10卷第2期, pp.86-89
- 歐陽林舟 2012. 「女子院校特色併学探究」『教育評論』2012年第4期, pp.36-38
- 祁斌斌 2009. 「由『女高師周刊』再識女高師音樂系」『音樂研究』2009年第1期, pp.39-53
- 祁斌斌 2014. 「從女高師音樂系走出的學生們」『星海音樂学院学报』総第136期, pp.106-112
- 任彦 2014. 「民国時期教会女子大学人材培養模式研究」『蘭台世界』2014.7月上旬, pp.141-142
- 石彤 2002. 「女大学生社会性別觀念比較研究」安樹芬主編『中国女性高等教育的歴史与現状研究』高等教育出版社
- 王紅岩 2009. 「金陵女子大学人材培養模式特色述評」『黑龍江高教研究』総第182期, pp.138-141
- 王延雄 2009. 「新聞史学界对延安女子大学新聞系的“系科”誤讀」『新聞知識』2009年9月, pp.59-60
- 王瑩 2015. 「20世紀上半葉金陵女子大学的音樂教育研究」『蘭台世界』2015.7月上旬, pp.129-130
- 夏芸 2009. 「中国における民弁高等教育機関經營に関する実証的研究－湖南省の事例分析を中心に－」『東京大学教育学研究科教育行政学論叢』第28号, pp.1-18
- 向前 2011. 「女子高校学生自我価値保護策略及相關因素」『湖南師範大学教育科学学报』第10卷第5期, pp.102-104
- 楊毅竹 2002. 「第六章中国女性高等教育的改革与發展」安樹芬主編『中国女性高等教育的歴史与現状研究』高等教育出版社
- 楊天立 2011. 「中国における独立学院の延生とシステムの構築」『東京大学大学院教育学研究科紀要』第51卷, pp.145-158
- 易銀珍 2007. 「女子大学併学特色の本源初探」『中国高教研究』2007年第10期, pp.56-58
- 張建奇 1997. 「我国女子高校的歴史回顧与現状研究」『吉林教育科学・高教研究』1997年第5期, pp.71-73
- 張素玲 2010. 「民国時期兩所女子大学的比較研究」『高教探索』2010年5期, pp.92-97
- 張秀坤 2004a. 「美国女子高校評介」『婦女研究論叢』2004年2期, pp.58-63
- 張秀坤 2004b. 「美国女子高校發展与特色」『比較教育研究』総第167期, pp.75-79
- 張永広・李亜娟 2007. 「対民国時期金陵女子大学“女性取向”の体育教育考察」『婦女研究論叢』総第80期, pp.33-38
- 鄭剛 2011. 「中国女子大学：抗戰時期中共培養婦女幹部的一次有益探索」『婦女研究論叢』総第108期, pp.47-53
- 朱峰 2011. 「性別、家庭与国家－從近代教会女子大学看基督教女知識分子群体的融合与衝突」『福建師範大学学报（哲学社会科学版）』総第166期, pp.138-148・159

(指導教員 橋本鉾市教授)